

熊本県博物館ネットワークセンターだより 熊本の自然と文化

編集・発行 熊本県博物館ネットワークセンター
2022年7月7日



No. 52

イベント情報 (令和4年7月～令和4年10月)

企画展

会場：熊本県博物館ネットワークセンター

入場無料

第1回企画展「昔のお金と今のお金」

古代から現代にかけてのお金の変遷に注目し、お金の歴史について紹介します。

○開催期間 令和4年5月31日(火)～7月31日(日)



文久永宝



小額政府紙幣10銭

第2回企画展

「熊本県・モンタナ州姉妹交流40周年記念企画展

恐竜に挑む科学者たち

～モンタナの化石が解き明かす恐竜の謎～

荒野を歩き化石に残された情報を読み解く科学者たち。その研究の成果をモンタナ州や熊本県内の化石とともに紹介します。

○開催期間 令和4年8月9日(火)

～10月10日(月・祝)



モンタノケラトプス
(レプリカ)



モンタナ州産
ティラノサウルス頭骨
(レプリカ)

フィールドミュージアムに飛びだそう!

プログラム	場所	日時	定員	内容	申込期間
川原の石ころ図鑑をつくろう	五木村 白滝公園	7月30日(土) 10:00～12:00	20名	川原のいろいろな石を観察します。	6月13日～ 7月15日
夏の星空を楽しもう	熊本市南区城南町 県民天文台	8月26日(金) 19:30～21:30	60名	天体望遠鏡で、夏の星座や星の観察を行います。	7月18日～ 8月12日
水辺の生き物を観察しよう	天草市福連木 福連木子守唄公園	8月27日(土) 13:00～15:00	20名	水中の生き物を観察します。	7月18日～ 8月12日
月の観察をしよう	熊本市南区城南町 県民天文台	9月9日(金) 19:30～21:30	60名	天体望遠鏡でとらえた月の様子を観察します。	8月1日～ 8月26日
化石を探そう	上天草市 千巖山	9月23日(金・祝) 13:30～15:30	20名	本物の地層と化石を専門家の解説で見学します。	8月15日～ 9月9日
植物体感ウォーク	合志市 弁天山	10月2日(日) 10:00～12:00	20名	植物のいろいろな特徴を体感します。	8月22日～ 9月16日
落ち葉図鑑を作ろう	津奈木町 舞鶴城公園	11月19日(土) 10:00～12:00	20名	落ち葉を集めて世界に一つの落ち葉図鑑を作ります。	10月10日～ 11月4日

対象：幼児～一般 ※小学校3年生以下は保護者同伴

申込み方法：熊本県・市町村共同システム「電子申請サービス」または、往復はがきに参加者全員の住所、氏名、年齢、電話番号、参加希望プログラム名をご記入の上、申し込みください。申込み多数の場合は抽選で参加者を決定します。右側のQRコードからも申し込みができます。

(往復はがきで申込みの場合は、返信用はがきに住所・氏名を記入してください。締切必着。)



記載されている行事は、新型コロナウイルス感染症拡大の状況や災害等により日程や募集人員が変更になる場合があります。詳細は当センターにお問い合わせいただくか、ホームページで御確認ください。

No. 269
民俗

手回し洗濯器

写真の資料は手回し式の洗濯器です。群馬県伊勢崎市出身の高月照雄氏が発明し、昭和 32 年に高崎市の林製作所から「カモメホーム洗濯器」という名前で販売されました。丸いメタリックな形状が旧ソ連の人工衛星「スプートニク 1 号」に似ていたので人工衛星型と呼ばれます。

付属の説明書によると、球体の容器に 40 度以上の湯を 1/5～1/3 量入れ、洗濯物と洗剤を入れます。蓋を閉めてハンドルを 10～20 秒ほど回します。内部で空気が膨張し、その圧力で洗剤を含んだ湯が繊維の中に浸透します。蓋を開けると内部圧力が瞬間的に低下して不完全真空状態となり、汚れが繊維から引き離される仕組み、だそうです。

わずか 10 秒で洗える、電気洗濯機の 1/5 の値段で買える、などと謳われ、高価な電気洗濯機には手が届かない人々の救世主となる画期的な製品でしたが、昭和 30 年代中ごろより電気洗濯機が安価で手に入るようになり、また、電気や上下水道などの整備が進んだこともあって、あまり広まりませんでした。しかし欧米では人気があり 30 万台近く売れたそうです。同様の仕組みを利用した類似製品は現在でも使われており、電気を使わないエコな道具として、日本でも再注目されています。(迫田 久美子)



図 1 手回し洗濯器 32×51×36cm
天草市



図 2 売り出し中の洗濯器 八代市
撮影年不明 麦島勝撮影

No. 270
動物

サワガニ *Geothelphusa dehaani* (サワガニ科)

サワガニ(図 1・2)は、青森県からトカラ列島中之島までに生息している日本固有のカニの一種です。カニの中では珍しく純淡水性で、浮遊幼生ではなく稚ガニの状態での孵化するため、生涯を通して移動する距離が小さく、地域ごとに遺伝的な違いが認められています。体色にも変異があり、赤いもののほか、白、水色、オレンジ、紫などが見られます。

本種は名前の通り主に川の源流～上流部に生息していて、ミミズなどの動物質や、落ち葉、木の実などの植物質まで、様々なものを食べています。水辺を離れて陸上を歩いていることも多く、分布域の広さや個体数の多さも相まって、私たちにとって最も身近なカニと言えるでしょう。

図 1 の標本は宇城市豊野町で採集されたもので、左が雄、右が雌です。本種はこのような雄のハサミの大きさが左右で違うことが多いようですが、その理由についてはまだよく分かっていません。身近な存在であるはずのサワガニでも、まだまだ分からないことも多いのです。

(中藺 洋行)



図 1 サワガニ標本(左が雄、右が雌/宇城市産)



図 2 サワガニ生態写真(上益城郡山都町)

No. 271
植物

アカネ *Rubia argyi* (アカネ科)



図1 アカネの標本

林内の道沿い、倒木や伐採で生じた林の切れ目など、森林が途切れて日あたりが良くなった環境には、成長の早い草本やつる植物が勢いよく生育します。アカネ（図1）はこのような環境で比較的普通に見られるつる性の多年草です。

この植物を手にとると、ザラザラ、チクチクとして、時には軽いけがをしまいます。よく見ると茎や葉にトゲがあることが分かります（図2）。このトゲは、どんな役割をしているのでしょうか？アカネを食べる昆虫類などから身を守っているのかもしれない。また、標本のために採集しようとする



図2 アカネの標本（図1）で見られるトゲ。

と、ほかの植物やつるどうしがトゲで絡んでいることがあります。トゲをひっかけて他の植物の上によじ登ったり、つるをトゲでしっかり絡み合わせて他の植物をおおうなど、他の植物との競争にトゲを利用しているのかもしれない。

アカネの根は色素を含み、かつては赤色に染める染料に使われていました。アカネの根で染めた赤い色が「茜色^{あかね}」です。根の付近（図3）では、根に触れた部分の台紙に赤い染みができており、根の部分に色素が含まれていたことがうかがえます。この標本は、1932（昭和7）年に現在の宇土市で採集されたものです。この標本は、植物の形だけではなく、色の情報までも90年の時を隔てて現在に伝えています。（前田 哲弥）



図3 アカネの標本（図1）の根周辺で見られる台紙の赤い染み。

No. 272
歴史

天保通宝（熊本市木下家資料）

およそ260年続いた江戸時代には、小判や寛永通宝など、金・銀・銅で作られた様々な種類のお金が使われました。中でも天保通宝は、天保6年（1835）から鑄造が始まった銅のお金（銅貨）です。それまでの銅貨が1枚1文や4文であるのに対して1枚100文という高額に設定されましたが、これは当時不足していた銅貨を補充することを目的としていたからです。

天保通宝は他の銅貨のような円形ではなく小判形で、中央に方形の孔があり、表面には孔の上下に「天保・通宝」、裏面には孔上に「當百」（100文に相当するの意）、孔下に製造を担当した金座^{きんざ}後藤家の花押が鑄出されています。

100文銅貨として発行された天保通宝ですが、大量に発行されたことで市場では額面より安く扱われてしまい、文久2年（1862）に幕府がお触れを出して額面通り通用させるように命じています。

明治4年（1871）に貨幣単位が円・銭・厘と改められると、天保通宝は1枚8厘（1000分の8円）として引き続き使用が認められます。しかし、次第に十分な量の新銅貨が供給されたことで流通不便と判断され、明治24年（1891）限りで通用が禁止され、貨幣としての地位を失うこととなります。（古澤 広大）



図1 天保通宝（表面）



図2 天保通宝（裏面）

No. 273
地学

ベレムナイト Belemnites

ベレムナイト化石は中生代を代表する化石の一つです。ベレムナイトはタコやイカ、オウムガイなどのなかまで、^{とうそくこうしょうけいあこう}頭足綱鞘形亜綱ベレムナイト目の動物です。ベレムナイトの化石は矢尻の形に似ており、ギリシア語の「矢尻」を意味する言葉から名付けられました。日本語では「^{やしし}矢石」とも呼ばれています。ベレムナイトの最も古い化石は、宮城県にある中生代三畳紀前期（約2億4800万年前）の地層から発見されました。

図1は葦北郡芦北町白木で採取したジュラ紀後期（約1億6000万年前）のベレムナイト化石、図2は葦北郡芦北町田浦で採取した白亜紀前期（約1億3000万年前）のベレムナイト化石です。どちらも矢尻や弾丸のような形をしているのがわかります。

ベレムナイトは、軟体部分の印象を残した化石から、現生のイカのなかまに似た生物が復元されています。現生のコウイカに最も近い海生動物です。図3のように体の中に殻があり、墨袋や鉤の付いた10本の腕を持っていました。ベレムナイトの内部構造を図3下段に示します。殻の後方は硬くて先のとがった鞘^{さや}と呼ばれる部分で、鞘の前方は中空でやや広がっていて、多数の部屋で仕切られた房錐^{ぼうすい}が入っています。さらに前方はへら状の前甲^{ぜんこう}となっています。房錐の多数の部屋は管（連室細管）で連結しており、オウムガイやアンモナイトの殻の内部と同じ仕組みで、浮力の調整などを行っていました。化石として残っているのは、ほとんどが鞘の部分です。

ベレムナイトは中生代に世界中の海で繁栄していましたが、白亜紀の終わり（約6600万年前）に絶滅しました。（廣田 志乃）



図1 ジュラ紀のベレムナイト化石



図2 白亜紀のベレムナイト化石

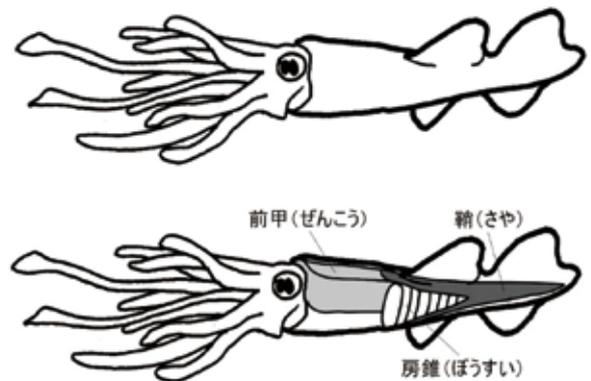


図3 ベレムナイト（上：復元図、下：内部構造図）

熊本県博物館ネットワークセンター

〒869-0524 宇城市松橋町豊福 1695

TEL: 0964-34-3301 FAX: 0964-34-3302

E-mail: hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp

HP: <https://kumamoto-museum.net/kmnc/>

[公共交通機関]

○九州産交バス

松橋バスターミナルより宮原経由
八代産交行き「希望の里入口」下車

○JR

松橋駅より約3km

